

特集

人類みなハンター

ハンターの知恵を追い、世界を踏破 池谷 和信

天下人と鹿狩 中澤 克昭

イヌワシを駆る悠久の奥義《騎馬鷹狩猟》 相馬 拓也

サバンナに轟く銃声、硝煙の臭い 安田 章人





みんぱくのゲームを やってみたい

まいつしろ

みんぱくが好きだ。この文章を読んでいる方々は全員好きだと思っが、もちろん私も好きである。

みんぱくに来ると、「世の中にはこんな様々な生活があるのか」と思う。特に私が好きなのは、日常で使う道具の展示だ。「なんとかして楽をしたいんだ!」という執念が感じられる道具は特におい。例えば漁具の釜、魚の通り道にほっておくだけで魚を捕まえられる。私がおのぐさな性格なので、ものぐさをつきつめたかのような道具を見ると親近感がわいて元気がでる。赤の他人の中に自分を見つけるのは、それがたどえものぐさという共通点でもとても楽しい。

でも、そうやって道具を通して世界の文化と素敵な出会いをしたとき、こころも思ってしまうのだ。

「これを実際に使ってみたい!」
みんぱくは博物館で、展示物はきちんと保存しなければならぬ。でも、道具というのは手に取らないとピンと来にくい。「この出っ張りが大事なのか!」「ここが持ち手だったのか!」という恥ずかしい勘違いにも、使って初めて気づいたりするのだ。

というわけで、みんぱくを愛する皆様に、この場を借りて私から提案させて欲しいことがある。それは「みんぱく監修で世界の民族の生活を体験できるゲームを作ってくれませんか」ということである。

みんぱくで展示されている道具の多くは、現代日本ですら難しいものが多い。しかし、どんなシチュエーションも再現できるゲームの中なら話は別だ。特に「狩猟」なんて、まさにゲームのテーマ

にびつたりだろう。「ポケットモンスター」「モンスターハンター」など狩猟ゲームはすでに山ほど出ているが、どれもリアルティや生々しさには欠けている。震をしかけて何日も待ったり、とらえた獲物の血抜きをしたり、みんぱくの豊富な民族学・文化人類学の知識を結集すれば、ゲーム界に一石を投じる画期的な狩猟ゲームができるのではないかと、ここまで熱弁したが、もしかすると(もしかなくとも)かなりのマニアにしか受けないゲームになるかもしれない。でも、たとえ数は少なかつたとしても「みんぱく監修リアル狩猟ゲーム」をやりたい人はいるはずだ。少なくとも、私は今すぐやってみよう。

それに、もしもそんなゲームが出来たら、世界各地で消えつつある狩猟文化を、ゲームを通して別の形で生き返らせることもできるかもしれない。現実世界ではなく、ゲームという仮想世界での文化保存。ものぐさな私はそんなゲームを早く誰かに作ってほしいと願っている。

プロフィール
エンタメライター。データ分析やインタビューを通して、なんでもないことを真剣に調べてみた記事をよくさん書いている。主なメディアにYahoo!ニュース個人、デイリーポータルZなど。アート作品のマッスルを延々と解説する初書籍「アート筋トレでスリム美体に!」(さくら舎)が発売中。特に好きなものは音楽と映画。

目次

- 1 エッセイ 千字文
みんぱくのゲームをやってみたい
まいしる

特集

人類みなハンター

- 2 ハンターの知恵を追い、世界を踏破
池谷 和信
- 4 天下人と鹿狩
中澤 克昭
- 6 イヌワシを駆る悠久の奥義
《騎馬鷹狩猟》
相馬 拓也
- 8 サバンナに轟く銃声、硝煙の臭い
安田 章人
- 10 みんぱく回遊
掘り棒はインド洋を越えて
市野 進一郎
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド
誰も住まなかった家
信田 敏宏
- 16 コレクションあれこれ
届け、連帯の声
三島 禎子
- 18 シネ倶楽部 M
今日も宝物は南洋の島から島へ
——「クラ」西太平洋の遠洋航海者」
門馬 一平
- 20 ことばの迷い道
「すみません」「かまいません」
相良 啓子
- 21 編集後記・次号の予告

表紙

獵場に向かうハンター(獵師)たち
(撮影: 鮎原一平、山形県小国町、2015年)

特集 人類みなハンター

ハンターは、現代日本にもいくらでもいる。
鳥獣を狩る人、海や川で釣りをする人、潮干狩りや虫捕りをする人はもちろん、
バーチャルな世界も含めれば、モンスター狩りに熱中している人もハンターだ。
狩りは、なぜ、それほどまでに人を魅了するのだろうか。



冬眠を終えたクマを探す(撮影: 蛸原一平、山形県小国町、2022年)

コレクション展示
ハンターのみた地球

会期: 2023年7月6日(木)~8月8日(火)
場所: 本館企画展示場の一部

ハンターの知恵を追い、 世界を踏破

池谷 和信

民博教授

今も、日本のレストランでのジビエブームは続いている。これらは、農作物を守る野生動物駆除のための狩猟がハンターらによっておこなわれていることと直結している。駆除された動物の肉は、資源を有効活用し自然との調和を維持する手段として理にかなっているからである。にもかかわらず、一向に獣害はなくなるならない。高齢化にともないハンターが減少しているという社会の側の理由もある。

世界を見渡せば、獣害対策としての狩猟のみ



現代のハンター。捕獲したイノシシを肩に担いで、罾を回収(沖縄県、西表島、2021年)

の種類、いつごろどの方向に向かったのかを察知する。

長い吹き矢の有効性

その後も、わたしはハンターを探して各地をまわった。すると熱帯アジア、極北ロシア、南北アメリカなど、初期人類の拡散した道に沿って、地球全体が対象になった。アジアの森での赤色野鶏(セキシヨウキ)、ベーリング海でのコククジラ、アマゾンの森でのウーリーモンキーなど、狩猟対象の生き物に応じて異なった狩猟具が使われていた。赤色野鶏には笛と銃、コククジラにはダーティングガン(爆発銃を発射する銃装置)、ウーリーモンキーには吹き矢である。いずれも、森や海での鳥獣の行動や生態に応じたハンターの知恵だ。

なかでも印象深いのがアマゾンの吹き矢猟である。ハンターは、まず草笛を吹きサルとの会話を試みる。樹高三〇メートル以上もある熱帯林の森のなかで、長さ三メートル近い吹き矢がいかに有効であるかを知り、感動した。矢には弱い毒が塗られていて、獲物をしびれさせて落下したところを棒でなぐって獲得するのだ。いつから、誰の発案で始まったのかはわからない。長いあいだにわたるわたしたち人類の環境への適応の結果であることは間違いない。

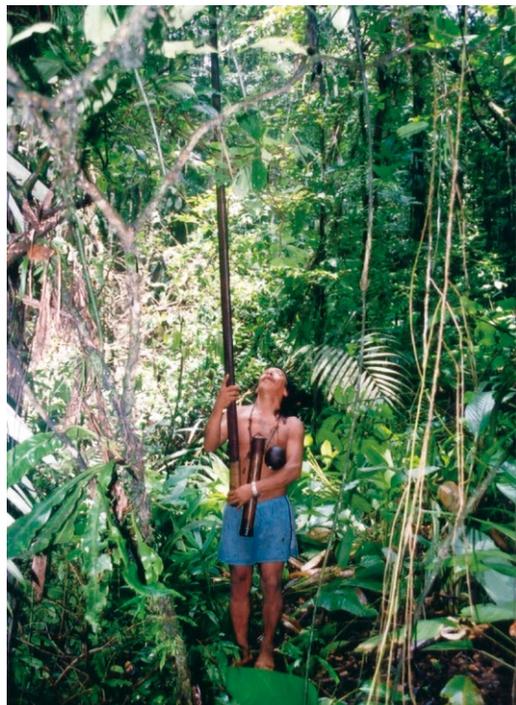
一方で、別のアマゾン地域ではイノシシに似た動物のベッカーイ猟が広くおこなわれている。毎年、およそ一〇万枚のベッカーイ皮が、手袋を作るためにヨーロッパに輸出されている。ローカルなハンターの知恵の継承もグローバルな経済とあきらかに結びついているのである。

ならず、衣食のための狩猟、娯楽のための狩猟も、今なお盛んである。狩猟は社会の側のものだろうか。本特集では、王権とかかわる日本の狩り、中央アジアの騎馬鷹狩(きばたかり)、欧米人による娯楽のためのスポーツハンティング、という三つの側面からそのテーマに迫ってみたい。

東北でも、カラハリ砂漠でも

わたしは、過去四〇年あまり世界中のハンターに弟子入りしてきた。獲物を追うハンターの後ろについて彼らの見方を学ぶために狩猟体験をしていた。わたしが最初に弟子入りしたのは、東北地方の山間部でクマ狩りをおこなうマタギである。春先の山は雪が残るものの歩きやすく、樹木は冬に葉が落ち尽くし、見晴らしがよい。山のなかでツキノワグマを探すのは大変かと思っていたら、冬眠後にクマが活動する場所にはほぼ決まっているという。その場所を見回り銃でしとめる猟であることを学んだ。

その後、人類誕生の地アフリカにおいてハンターに弟子入ることができた。見渡す限り地平線の見える平坦地であるカラハリ砂漠で、当初は自分の位置すらわからない。イネ科の草に覆われた厚い砂地のなかに足がくい込み歩みにくい。とはいえ、この砂地のおかげで動物の足跡が残る。ハンターは、その足跡を見て動物

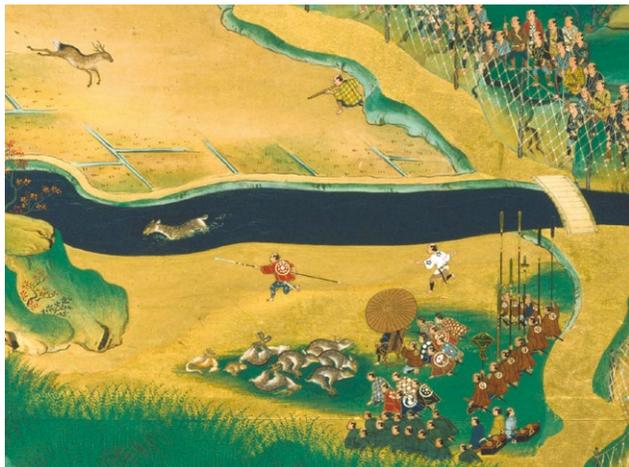


上:アマゾンの吹き矢猟(エクアドル、2001年)
下:海外に輸出されるベッカーイの皮(ペルー、2010年)

天下人と鹿狩

中澤克昭

上智大学 教授



右：《江戸図屏風》右隻(部分)、17世紀(国立歴史民俗博物館蔵)徳川家光が石神井でおこなった鹿狩を描く
左：諏訪社の供物の復元展示(長野県、茅野市神長官守矢史料館、2010年)

王朝文化だった鷹狩

王の狩猟は、「遊興」や「スポーツ」といったことばでは理解しきれない意味をもつ。古今東西の王たちがくりひろげた狩猟には、象徴性や高い政治性を帯びたものが少なくない。王の権力の起動装置とでもいえるべき役割を果たしたこともある。

古代には、天皇も狩猟をおこなった。例えば、桓武天皇は平安京の近郊で頻りに狩猟をくりかえしたことで知られる。九世紀以降、殺生を禁じる仏教の影響が強まると、天皇主催の狩猟は減るが、鷹狩は王朝文化の一部として受け継がれていく。室町・戦国時代には、武家のあいだでも鷹狩とその獲物の贈答が流行し、天皇へ鷹狩の獲物を献上することが、天下人と天皇との結び付きを象徴する儀礼となる。

中世の武士には、鷹狩だけでなく、弓矢で鹿・猪などを射とめる獸猟を職能とする者が多く、神社に供える鳥や獣を捕獲したのも、その地域の武士たちだった。信濃(長野県)の諏訪大社は、中世、盛大な狩猟神事があったことで知られる。五月初めの五月会と七月末の御射山祭は、諏訪社最高位の大祝をはじめとする神官が頭人(祭祀に奉仕する当番の武士たち)を率いて、霧ヶ峰や八ヶ岳の麓に位置する御射山社周辺の狩場で、それぞれ三日間、狩猟をくりひろげた。

「狩猟王」と称すべきカリスマ

狩人でもある武士たちを従えた源頼朝は、王の狩猟は、庶民にもなじみ深い物語の舞台となっており、頼朝の狩猟と徳川將軍家の狩猟のダブルイメージは、ひろく庶民にも共有されたのである。明治維新後、幕府の鷹匠の一部が新政府に召し抱えられ、天皇の御場が設営された。現在も埼玉県越谷と千葉県新浜にある鴨場はその名残である。動物愛護意識の変化もあって皇族の狩猟はなくなったが、狩猟は野生のキャプチャーだと考えれば、海洋生物や魚類・鳥類の研究などに現代の王権と野生との結び付きをみるることができるかもしれない。

士

生禁断令は厳しくなった。江戸の將軍も四代家綱から狩猟をしなくなり、五代綱吉は鷹狩も廃止し、「生類憐れみの令」を命じた。ところが、秀忠から続く徳川宗家の血筋が絶え、紀伊徳川家出身の吉宗が八代將軍となる。これはいわば王統の交替であった。吉宗は、鷹狩を復活させ、鹿狩も再興させる。

もともと規模が大きかったのは、享保一〇(一七二五)年と翌一年に下総国小金牧(小金原とも。現在の千葉県西北部)でおこなわれた鹿狩で、これを先例として、寛政七(一七九五)年には一代將軍家斉、嘉永二(一八四九)年には二代の家慶も、小金原で鹿狩をおこなった。家斉は「鎌倉右大將の富士の狩場」すなわち頼朝の富士の巻狩を意識しており、小金原に設営された土盛りの御座所「御立場」は、「小富士山」と称された。



上：《月次風俗図屏風》16世紀(東京国立博物館蔵、出典:ColBase[https://colbase.nich.go.jp/])
鎌倉時代に源頼朝がおこなった富士の巻狩を描く
下：歌川貞秀画『富士の裾野巻狩之図』嘉永元(1848)年、山口屋藤兵衛版(上智大学中澤研究室蔵)
頼朝の姿は見え、御立場とその前でくりひろげられた狩りの様子を詳細に描く



「狩猟王」と称すべきカリスマである。軍事政権の首長となった頼朝は、建久四(一一九三)年、那須、浅間山麓の三原、そして富士野と、三つの火山の裾野で大規模な狩猟をおこなう。富士の巻狩(獣を集団でとりまいて捕獲すること)において、頼朝の嫡子頼家が初めて鹿を射とめる、その晩、山の神を祀り、矢開(箭祭)という儀式がおこなわれた。獲物には、頼家が首長の地位を受け継ぐ資格をもつ者であることが神に認められたという意味があり、矢開は一人前の狩人になったことを祝う祭儀だったのである。頼朝の富士の巻狩は、東国の王の一大イベントとして後世まで語り継がれた。江戸に幕府を開いた徳川家康、子の秀忠、孫の家光、この三代の狩猟には、かつての頼朝・頼家父子の狩猟と、次のような共通点がある。①政権所在地は関東で、京都の朝廷とは一線を画し、関東または東海地方で大規模な狩猟をおこなった。②鷹狩だけでなく、王朝の貴族社会では忌避された鹿狩(獸猟)を含む。③將軍自ら獣を仕留め、首長の實力を直接・明確に示した。④合戦で用いられる武力をそのまま獣に向けた。鎌倉時代には馬上で弓矢、江戸初期には弓矢だけでなく、槍と銃も使用している。動員した人びとの編制も実戦さながらであった。

「富士の巻狩」イメージの大量消費

王権が確立すると、王の狩猟が必要とされなくなった点も共通している。鎌倉殿は三代実朝以後、狩猟をしなくなり、鎌倉幕府が命じる殺

イヌワシを駆る悠久の奥義

相馬 拓也

京都大学 特定准教授

騎馬鷹狩文化の起源を求めて

鷹狩の技法は中央ユーラシア遊牧民のあいだで受け継がれた特異な狩りの手法であり、おそらく三〇〇〇年前ごろに中央ユーラシアのどこかで始まった。それまで数多くの危険を冒して獲物を狩ってきた人類にとって、タカ、ハヤブサ、



バヤンウルギー県のイヌワシ祭りで盛装したカザフ鷹使いの長老(モンゴル、2006年)

イヌワシなどに狩猟を「代替」させる鷹狩とは、ある意味では革命的な発想の転換でもあった。特に大型で「最強の空の王者」イヌワシを手なずける騎馬鷹狩文化は、遊牧民に伝わる「奥義」であり、現在でもモンゴル西部アルタイ山脈や、キルギス東部イシククル州の鷹使い《イーグルハンター》たちに受け継がれている。いまでも鷹使いの数多いモンゴル西部のサグサイ村を訪ねてみると、村の軒先や塀の上に無造作にイヌワシが据えてあることに驚かされる。そして、キルギス東部のイシククル州ではイヌワシだけではなく、ハヤブサ、オオタカを用いている。鷹使いたちは一〇名程度で独自のSNSグループを作り、TikTokやInstagramで、狩りや猟果の様子と、自身の愛鳥の動画をシェアして楽しむいまどきの姿がある。現代にいたるまで、鷹狩の「奥義」は決して「秘技」などではなく、コミュニティの誰もがその知と技法に触れることができた。だからこそ数千年のときを経てなお、遊牧民の「奥義」としていまに伝えられているのだろう。

「友」としてのイヌワシとの邂逅

カザフやキルギスの騎馬鷹狩では、メスのイヌワシを向ける掟、イーグルハンターたちの大自然への深い愛着が込められている。

出猟で知覚するヒトと大自然との絆

そして冬場の出猟とは、手練れたハンターでない限りあまり楽しいものではない。凍てつく荒涼とした山岳地に生命の存在はほとんど感じられないからだ。若き鷹使いの初めての出猟に同行すると、放鳥できずに猟果が上がらないことも多い。吹きすさぶ風で氷点下四〇度を下回るような酷寒の大地で、イーグルハンターたちはわずかな獲物の動きに目と耳を研ぎ澄まさないければならない。騎馬鷹狩ではおもに冬毛のアカギツネを狙う。そのふさふさの毛皮は、防寒具作りには欠かせないためである。やみくもに騎馬登行するのではなく、イーグルハンターは小高い丘上の見晴らしの良い場所で、獲物が出るのをじっと待つ。大声をあげて眼下を進む勢子との連携が成果を左右する。勢子は経験豊富なハンターが担当することもあり、出猟で初めに捕れた獲物は勢子に優先取得権がある。騎馬鷹狩とはたった一人でできるものではない。

ワシの捕獲も、知と技法の継承も、出猟も、長老や経験豊富なハンターとの結び付きがなければ実践することはできない。

およそ七〇〇万年にもおよぶ狩猟生活で、人類には「狩り」「磨り」、そして「喰らう」という、野性がその身に刻み込まれているのだろう。それでも、鷹狩が示してくれるものとは、狩るといふ残酷性を宿しながら、イヌワシを慈



イヌワシの対地揚力は、簡易測定で四〇キログラムを超えることも。小家畜や人間の子どもを引きずり運ぶ可能性もある(モンゴル、バヤンウルギー県トルボ村、2012年)



ハヤブサ

オオタカ

イヌワシ

キルギスではイヌワシの他にも、ハヤブサやオオタカも鷹狩に用いられる(キルギス、イシククル州グレゴリエフカ、2022年)

ヌワシのみが馴致される。オスよりも強壯で、戦闘的な性格だからとされている。オスワシは鈍重で狩りには向かないとされ、敬遠される。カザフでオスワシをあらわす「サルチャ」とは、「くの坊の男性」を揶揄して用いられることもある。狩猟用イヌワシは、巢から捕獲した巣鷹「コルバラ」と、罠で捕らえた成鳥「ジュズ」のふたつの方法で入手される。アルタイ山脈のイーグルハンターは、イヌワシの年齢に応じて満一〇歳まで年齢を用いてよびあらわす。それしむという、相反する猛りと畏れの感情を、まるで対位法のように精神文化のなかに育んだことにある。そして猛禽飼育が、不可知なエコシステムと鷹匠とのつながりの見取り図を素描してくれたとともに、コミュニティの成員同士のつながりさえももたらした。イヌワシがつむぐ「ヒトと大自然との絆」——それこそがまさに、「文明」を自認する社会にもっとも足りない断片だといえるのではないだろうか。

まだ頼りない若き鷹使い(16歳)の初めての出猟。手練れた兄から薫陶を受けている(モンゴル、バヤンウルギー県サグサイ村、2020年)



サバンナに轟く銃声、硝煙の臭い

安田 章人

九州大学 准教授

我々は、すぐに彼らの痕跡を見つけた。真新しい足跡と排泄物。どうやら、この小高い丘を登っているようだ。気づかれないように、そして臭いをかぎつけられないように、息を殺して風下から群れに近づく。丘を登り切ったとき、木々の間から黒と赤茶色の巨体が垣間見えた。ライフルの射程内に入れるために、さらに近づく。ガイドの指示で、スペインから来た客は射撃姿勢に入った。サバンナの静寂を切り裂く轟音。硝煙の臭い。黒い巨体を揺らし、オスのバッファローは地面に倒れた。首を一発で撃ち抜かれたようだ。絶命したのを確かめるために、ガイドは倒れた獲物に石を投げつけた。石は身体に当たったが、バッファローはピクリとも動かなかった。それを確認すると、客とガイドは満面の笑みを浮かべ、がっちりと握手をした。そして、死体となったバッファローを起こし、体勢を整え、記念撮影をした。

これはわたしが『護るために殺す?—アフリカにおけるスポーツハンティングの「持続可能性」と地域社会』(勁草書房、二〇二三年)に記した、カメルーン北部州でのスポーツハンティングの様子である。

スポーツハンティングは、野生動物を「救う」のか?

こうしたスポーツハンティングによって生み出される多額の観光収益は、野生動物保全活動の貴重な資金源となり、また、地域社会の経済的な振興にもつながるとされている。そして、スポーツハンティングには、狩猟できる野生動物の性別や種類、頭数に制限がかけられていて、理論上、野生動物が絶滅しないようになってい



カメルーンのサバンナに広く生息するコブ(アンテロープの仲間)(2011年)



カメルーン北部州でバッファローを仕留めたスポーツハンター(2007年)

年間一七〇億円もの観光収入

人間は、野生動物の肉や皮、骨を食料あるいは生活資源として利用するため、田畑や家畜、人命を守るために狩猟をおこなう。しかし、人

る。つまり、「スポーツハンティングは、地域社会と野生動物を救う」とされている。

しかし、実際には、スポーツハンティングによって生み出される観光収益のほとんどは、その国(多くの場合、途上国)や地域社会には落とされず、外国資本によって海外に流出してしまっていることが多い。また、狩猟制限についても守られていないこともあり、例えば、タンザニアにおいて一九九五年から九八年にかけて娯楽目的で狩猟された七頭のヒョウのうち、約三割が狩猟が禁止されている雌であったという報告もある。

さらに、スポーツハンティングに対する倫理的な批判も巻き起こっている。「スポーツハンティングとは、娯楽のために野生動物を狩ることである」と聞いて、「それは残酷だし、動物がかわいそうだ」と眉をひそめた人も少なくないだろう。二〇一五年にジンバブエにおいて、セシルと名付けられて観光客に人気だった雄ライオンを狩猟したハンターが強い非難の的となった騒動のように、スポーツハンティングは動物愛護活動家やベジタリアンなどからの批判の矢面に立たされている。

スポーツハンティングは、「残酷で時代遅れな狂気の遊び」か、あるいは「生態的な持続可能性と経済的な豊かさを実現する観光」か。この娯楽に特化した狩猟が、今後もおこなわれ続けているかは、獲物となる野生動物が十分に生息していることはもちろんのこと、ハンターとハンター以外の人の関係、そして地域社会と国際社会とのかかわりに左右されるだろう。

間が野生動物を狩るという行為は、野生動物と対峙するスリルや、大量あるいは巨大な獲物を仕留めたときに得られる征服感や自尊心をもち、それは快楽や娯楽へとつながる。このような娯楽性を主たる目的としておこなう狩猟が、スポーツハンティングである。

日本における狩猟といえば、近年問題視されているイノシシやシカによる農作物被害を防ぐためにおこなわれている有害鳥獣捕獲が思い浮かび、娯楽のための狩猟はどこか縁遠いものに聞こえるだろう。あるいは、アーネスト・ヘミングウェイの小説『キリマンジャロの雪』や『ランシス・マカンバーの短い幸福な生涯』のように、遠いむかしの植民地時代におこなわれていたことと思うかもしれない。

しかし、世界では、現在でもスポーツハンティングは観光産業として活発におこなわれている。例えば、アフリカは、スポーツハンターにとって今もむかしも、おもに欧米からやって来る富裕層ハンターにとつての「故郷」であり、メッカであり、年間一七八〇〇人以上が訪れる。アフリカ最大のスポーツハンティング産業界である南アフリカ共和国には、スポーツハンティングのために「野生」動物を繁殖飼育させる牧場が一万カ所以上もあり、年間約一七〇億円もの観光収益が生み出されている。また、近年は、カザフスタンやウズベキスタンなどの中央アジア諸国で、巨大な角をもったシカの仲間を目玉として、あらたなスポーツハンティングによる観光振興が進められている。



右: 狩猟に反対する動物愛護団体の看板(ケニア、ジョモ・ケニヤッタ国際空港、2008年)
左: 壁に掛けられたトロフィー(南アフリカ共和国、2016年)

民博の展示場を訪れる人のなかには、見たいものが決まっている人もいるだろうが、特に決まった目的もなく、展示物と向き合うのも

いいものだ。そう思うのには理由がある。あるとき、わたしは民博の展示物のなかにサルに関するものがどれぐらいあるか、駆け足で展示場を回りながら見てみたことがある。サルを探したのは、わたしが霊長類を研究しているからだ。

結果は残念なものだった。展示場のなかで見つけたものは、中国地域の文化展示にあった焼きものできた十二支の申だけだったのだ。しかし、このとき別の発見があった。

「東南アジアのなかのマダガスカル」を発見！

それは東南アジア展示に到達したときのことだ。民博の本館展示場は、オセアニアから始まり、世界を一周するように回ることができる。東南アジア展示は少し疲れてきたと思ふころにあらわれる。わたしは、そこで見たある展示物に大変驚いた。それは「掘り棒」と表示されていたが、わたしが長年調査を続けているマダガスカルのどこにでも見られるアンガデイという道具に瓜二つだったのだ。

アンガデイは、棒の先に鉄の刃を付けた道具で、**權型鋤**と説明されることもある。舟をこぐときに使う櫂に似た形をしているから

インドネシアのものだという表示を見て腑に落ちた。マダガスカル人の祖先は遠くインドネシアから移住したと考えられており、言語や形質だけでなく、文化にも近いものが見られるからだ。マダガスカルはよく「アフリカのなかのアジア」とよばれるが、展示場では「東南アジアのなかのマダガスカル」を発見したことになる。

展示場で見た掘り棒はスラウエシ島のトラジャ族のものだった。後日、民博の標本資料目録データベースで確認してみると、マダガスカルのベツイミサラカ族のアンガデイとよく似ていた。

調べてみると、過去にもわたしと同じような印象を抱いた研究者たちがいた。一

九八〇年代に文部省科学

研究費海外学術調査「マレー型農耕文化の系譜」というプロジェクトで、複数の東南アジア研究者がマダガスカルを訪れ、東南アジア



刃の幅が広いアンガデイを使って調査用のバケツを埋め込む深い穴を掘る(マダガスカル、ベレンティ保護区、2017年)

掘り棒は

インド洋を越えて

みんぱく回遊

東南アジア展示「生業」

マダガスカルの掘り棒「アンガデイ」
(長さ97センチメートル、
H0268937、収蔵庫にて保管中)



観覧券売場
本館展示場

インドネシアの掘り棒
(長さ148センチメートル、K0000025)

市野進一郎
民博 特任助教



アンガデイを手にもち、これから除草作業をおこなうベレンティ保護区の従業員たち(マダガスカル、2010年)

H、Kからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

だ。水田耕作が盛んなマダガスカル中央高地では、田んぼの準備をする際に、この道具を使って土を掘り起こす。牛を使うよりもこの道具を使う方が深く掘り起こすことができるのだという。鉄の刃には幅や形の異なるいくつかの種類があり、幅の広いもので土を掘り起こし、狭いもので種まき用の穴を作るといったように、作業に応じて複数のアンガデイを使いわけているようだ。

水田のない南部でも農作業に使われるが、わたしが実際に何度か目にした使い道は穴掘りや除草である。小型動物の調査で、バケツを地面に埋め込み、そこに落下する動物を集めたことがある。この穴掘りがなかなか大変な作業なのだが、保護区の従業員に頼むとアンガデイを使って手際よく穴を掘ってくれた。また、観察路に草が伸びてくると、従業員が並んで歩きながら、アンガデイを使って器用に草を掘り起こしていくのをよく見かけた。なぜマダガスカルのアンガデイが東南アジア展示にあるのかと訝しく思ったが、それが

における農耕との比較を試みている。そのとき、マダガスカルのアンガデイについての議論があり、スラウエシ島の掘り棒やフィリピンのイフガオ族の權型鋤によく似ていることが指摘されている。それらは、マダガスカル中央高地と同じように、水田での作業に使われるそうだ。東南アジアをフィールドにする研究者たちは、わたしとは逆に、マダガスカルでアンガデイを見ることによって、東南アジアの農具との類似性に気づいたようだ。

よび起こされた穴掘り風景の記憶

マダガスカルとインドネシアの関係を知識として知っていても、実際の展示物を見ると圧倒的な説得力を感じる。何しろ、その掘り棒を見た途端、わたしの脳裏には慣れ親しんだマダガスカルの人が地面に穴を掘る様子が思い浮かんだからだ。興味深いのは、わたしは特に掘り棒に関心があるわけではないのに、マダガスカルでの日常のなかで見てきたものが、記憶のなかによみがえってきたことだ。

このように、展示物で何らかの引つ掛かりを感じるものは、自身の過去の記憶と何かしら結びつくものがあるのではないだろうか。こうした体験はフィールドにおける発見のプロセスとも似ている。きつと誰でも膨大な展示物のなかから自分なりの引つ掛かりを感じるものが見つかるだろう。そうしたとき、なぜその展示物が気になったのか考えてみると、自分のなかで新しい発見があるかもしれない。



マダガスカル中央高地南部の棚田
(撮影: 栗林愛、フィアナランツウア近郊、2006年)



大エジプト博物館のファサード(2023年) ©GEM-FAED

【お問い合わせ】
本館研究協力課国際協力係 kokkyo@minpaku.ac.jp



【公開シンポジウム】
「大エジプト博物館のいま—ファラオの至宝をまもる2023」
開館に向けて準備が大詰めを迎えている大エジプト博物館に対して、日本の国際協力機構や民博はさまざまな支援をおこなってきました。大エジプト博物館の現状と魅力を語り、その社会的な役割や未来について考えます。
日時 8月5日(土)13時30分～16時45分(12時30分開場)
会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員350名)
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます(定員300名)。
【申込期間】
6月30日(金)～7月27日(木)
※事前申込制、先着順、参加無料
※申込方法およびシンポジウムの詳細は、左記ホームページをご確認ください。
https://www.minpaku.ac.jp/aiiec_event/44476

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
※定員400名
※事前申込制、先着順、参加無料
※当日参加受付あり(定員80名)

第535回
7月15日(土)13時30分～15時(13時開場)
情報工学研究者のフィールドワーク

講師 宮前知佐子(本館 助教)

【申込期間】
■一般受付 7月12日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第536回
8月19日(土)13時30分～15時(13時開場)
死してなお「生きる」者
—現代イランにおける戦後と殉教者

講師 黒田賢治(本館 助教)
中東の国イランでは、戦没者は死してなお「生きる」殉教者として扱われ、時に彼らは、その生前・死後に起こした奇跡とともに語られます。彼らの奇跡譚からイランの戦後社会を考えます。



共同墓地に埋葬された殉教者たち(2019年)

【申込期間】
■友の会先行予約
7月10日(月)～14日(金) (定員80名)

お問い合わせ 国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form>



友の会

お申込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

友の会講演会

参加形式
①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第538回 7月1日(土)13時30分～15時
つないでほぐく—アイヌとシサム
講師 北原モコトウナン(北海道大学 教授、本館 特別客員教員)
※講師はオンライン登壇
司会 齋藤玲子(本館 准教授)

第539回 8月5日(土)13時30分～15時

【コレクション展示】
「ハンターのみた地球」関連
人類の原点はハンターにあり!

話者 関野吉晴(探検家)
池谷和信(本館 教授)
※オンライン配信はありません。

約700万年の人類の歴史のうち、狩猟採集生活の時代が99.8パーセントを占めるといわれています。この時代に、共感性に富んだ社会性を育んだ人類は、地球全体へと拡散することに成功しました。その後、農耕や近代文明を発達させてきましたが、人間性の基盤をつくった狩猟採集の文化はいまでも世界中にみられます。人類拡散の旅路を逆ルートからたどった探検家と、世界各地の狩猟採集社会の調査を続ける研究者が語り合い、ハンターをとおして人類の普遍性や未来をさぐります。

東京講演会

友の会会員：無料、一般：500円
※事前申込制、先着順(定員50名)
※オンライン配信はありません。

第135回 9月17日(日)13時30分～15時

【特別展「交感する神と人—ヒンドゥー神像の世界」関連】
神になる人びと

—南インド・ケーララ州のテイヤム祭祀
講師 竹村嘉晃(平安女学院大学 准教授)
会場 モンベル渋谷店5階サロン

南インド・ケーララ州北部のヒンドゥー世界では、不可触民男性の身体を介して村人の前に顕現する神霊(テイヤム)を祀った祭儀が盛んにおこなわれています。本講演では、祭儀空間で神霊と交感する村人の様子にふれながら、カーストの伝統的職業として神霊の役割を世襲的に受け継いできた「不可触民」たちの今日の姿を紹介します。

お問い合わせ 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

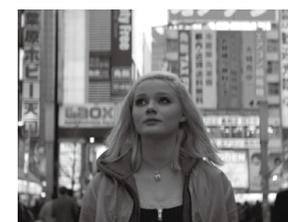


マタギ

【コレクション展示】
「ハンターのみた地球」
人類は、かつて皆ハンターでした。ここでは、世界各地のハンターの生きざまをとおして人と動物、人と人のかかわり方を紹介します。人類の狩猟という視点から地球の未来を考えることをねらいとしています。
会期 7月6日(木)～8月8日(火)
会場 本館企画展示場の一部

みんなく映画会
「HARAJUKU 原宿」
日本に憧れるソルウェーの少女を描いた映画。クリスマス直前、少女を取り巻く環境が一変します。彼女は幸せな社会にたどり着けるのでしょうか。
日時 7月29日(土)13時30分～16時15分(13時開場)
会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員350名)
上映作品 「HARAJUKU」(2018年)
参加費 要展示観覧券イベント参加費は不要
解説 安倍オースタッド玲子(オースロク大学 教授)
エイリック・スウェンソン(映画監督)
※ともにオンライン登壇
司会 宮前知佐子(本館 助教)
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日11時から本館2階会場前にて展示観覧券を確認

ワークショップ
みんなく夏休みもワークショップ
「フィールドワークに挑戦!—見る・感じる・描く—オーストラリアの先住民アート」
日時 7月22日(土)10時30分～15時40分(受付10時)
会場 本館第3セミナー室
講師 平野智佳子(本館 助教)
対象 小学4年生～6年生 定員10名
参加費 500円
持ち物 昼食、飲み物、タオル
※汚れてもよい服装でご参加ください。
※事前申込制、先着順
みんなくミュージアムパートナーズ(MMP)のワークショップ
日時 7月8日(土)、8月12日(土)12時～15時30分(最終受付15時)
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付



©Maipo Film

後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。
【申込期間】
■一般受付 7月21日(金)まで
※友の会先行受付は終了しました。

刊行物紹介

■中尾勘悟 著、久保正敏 編著
『有明海のウナギは語る—食と生態系の未来』
千里文化財団 発行、河出書房新社 発売
2,970円(税込)



■平野智佳子 著
『酒狩りの民族誌—ポスト植民地状況を生きるアボリジニ』
御茶の水書房 8,800円(税込)



■藤田瑞穂、川瀬慈、村津蘭 編
『拡張するイメージ—人類学とアートの境界なき探究』
亜紀書房 2,970円(税込)
イメージをさまざまに表現してきたアート。文化や技術、宗教とそれらに結びついたイメージの多様性を探究してきた人類学。ふたつの交わるところで研究、制作、展示を行う11人の実践に基づく論集。



■松尾 瑞穂 編
『サブスタンスの人類学—身体・自然・つながりのリアリティ』
ナカニシヤ出版 4,180円(税込)

人が、人や集団とつながっていることのリアリティは、何によってもたらされるのだろうか。本書は、サブスタンスという概念を手がかりに、身体と自然を根底から問い直し、多様に構築/切断される人と人との関係の論理、人が家族や親族、社会とつながる関係性のロジックの解明を目指すものである。



誰も住まなかつた家

信田敏宏
のぶた としひろ
民博教授



家の裏側。トイレの後ろには身長ほどの深さの穴が掘ってあり、便器からパイプで流れていくくみになっている。穴が排泄物でいっぱいになると、他の場所に穴を掘ってトイレごと移動する(写真はすべて1998年に撮影)



呪文をかける

マレーシアの森に暮らす先住民オラン・アスリの村でフィールドワークをしたときのこと。当初は村の会館の二室に寝泊まりしていたが、使える空き家があるというので、引越すことになった。幼稚園の先生用にと政府が建てた高床式の家屋だったが、誰も住んだことがないという。なので、周囲は草ぼうぼうで、家のなかには家具ひとつもない。まずは、住めるように掃除をすることから始めた。人口四〇〇人ぐらいの村なのだが、子

どもも含めて五〇〜六〇人が集まって、みんなで裏庭の草刈りや草焼き、家のなかの大掃除をしてくれた。次は電気と水とおす作業だ。調査助手のアサット君と一緒に町に出かけ、水道管、電気の延長コード、照明器具などを購入した。数十メートル離れた隣の家に住むアサット君の家から水道管を延ばして土に埋めた。電気は反対側の隣の家から数十メートルの延長コードでつないだ。隣の住人は、泊まりがけで森に出かけるたびにブリーカーを落とすので、その家に電気がつないでいることをすっかり忘れていたようであるが、意外と電気がなくても不自由はなかった。引越し当日。村のリーダーで呪術師でもあるバテインが呪文をかけた樹脂をアサット君がもってきた。アサット君は



森の中にあるドリアン果樹園の小屋の前で、養子として受け入れてくれた家族とわたし(左下)。姉(左から2番目)は、たびたび取れたての果物や野菜をわたしの家に届けてくれた

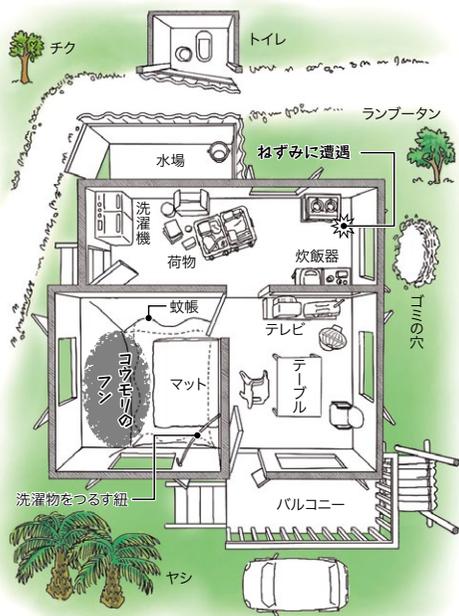
一人暮らしをしてみました

その樹脂クミアンをお椀に入れ、ライターで火をつけて煙を焚いた。そして、何やら呪文を唱えながらお椀をもって家のなかを回り始めた。それぞれの部屋を七周し、最後に、わたしにクミアンの煙を顔や体にかけるように言った。初めてこの家に住むわたしに災いがおよばないように、こうした儀式が必要らしいので、言われたとおり煙をかけておいた。

一人だけど一人じゃない

わたしの家を紹介しよう。まず、サン

ダルを脱ぐ。それから階段を五段ぐらい上がると、バルコニーがある。庭の方に伸びているバルコニーは、村のおじさんが作ってくれた夕涼み用の休憩場である。そこらにある木やヤシの葉を使って、ものの一時間ぐらいででき上がった。ドアは内側に開く。玄関はなく、どの部屋も板張りの床には村の家々と同じように、町で買ってきた柄物のビニールのフロアシートを敷いた。最初の部屋はリビングで、テレビやテーブル、椅子がある。ここで一年半あまり毎日フィールドノートを書いてきた。次の部屋は寝室である。マットレスを直置きにしている。タンスはないので、服は壁に張った紐につるしている。窓にはガラスも網戸もないので、蚊帳は必須である。壁と屋根のあいだにも大きな隙間があるので、いろんな生き物が出入りする。ヤモリはときどき上から落ちてきてびっくりさせられるが、わたしがしゃべるとチツチツと鳴いてくれるので、同居人として認めていた。

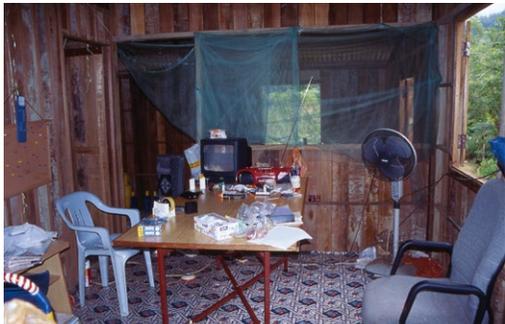


村全体が大きな家

わたしの家には村びとがよくふらつと入ってくるものがあつた。貧しくて学校に通えなかったという生い立ちを話す人や、お化けの話をする人、死後の世界の話をする人もいた。隣の家は、一歩外に出れば誰かと声をかけ合い、子どもを叱る声や赤ちゃんの泣き声がどこかしらで聞こえる。村びと同士は親族関係でつながっているため、知らない人はいない。わたしも養子になっているので、そうした親族関係の輪のなかにいる。お互いの家を頻りに行き来し、問題が起こればみんなで解決し、造作が必要となれば、村びと総出で作業をする。一人暮らしといっても、日本とは違い、村全体が大きな家のように、そのなかの一間を借りて暮らしているような感覚であつた。夜になつても、静寂は訪れず、虫の声がうるさいぐらいに聞こえてくる。

一五センチぐらいのネズミとは「闘争」を繰り返した。いちばん困つたのはコウモリだつた。しばらく留守をすると、必ず暗闇にコウモリが数匹いる。箒で追払い、寝室に散らばった糞を掃除しないといけない。いくら掃除しても、しばらくは異臭がとれない。犬がしばしば家の周りをうろろろして、「チエー！」と言つて追い払うと逃げていったが、なか

には気弱そうな犬もいて、そんなときは、わかるはずもないだろうが、日本語で話しかけたりした。いちばん奥の部屋は台所である。台所といつても水が出るキッチンや冷蔵庫、食器棚はなく、ガスコンロと洗濯機、その他荷物が置いてある。ここでゴザを敷いて地べたで食事をしてきた。二槽式の洗濯機は、使うときだけホースをつないで水を入れる。水場とトイレは家の外にあつて、水場では食材や食器を洗つたり、水浴びをしたりする。トイレにはプラスチックの和式の便器が埋め込まれている。もちろんトイレトペーパーはなく、用を足したあとは、バケツの水でおしりを洗つて、水を流す。ゴミは、窓の外に掘つてある穴に放り込んでいく。



毎朝、フィールドノートを書いていたテーブル。日中、気温が上がると、天井が少し高い台所の部屋に避難していた。台所とリビングとのあいだには、コウモリよけのネットを張っていた

届け、連帯の声

三島 禎子 民博 准教授



場を盛り上げるのは伝統楽師の役割である(写真はすべてバケル県にて2017年に撮影)

セネガル河上流域の民族文化の映像

映像本数：238本

2017年開催のセネガル河上流域における「民族文化週間」の映像を収めたデータベース。20カ村で撮影した踊りや歌、伝統儀礼のほか、参加者の声なども収録。日本語・英語・フランス語で公開中。利用者のコメントによって、今後も成長していく。

<https://ifm.minpaku.ac.jp/hautsenegal/>

演目を終えた
少女たち



古いセネガルの知人が「民族文化週間」を見に来ないかと声をかけてきた。彼からの誘いはいろんな意味で意外であったが、わたしは行ってみることにした。二〇一五年のことである。

疑問ばかりの説明

セネガルは一九六〇年の独立後、初代大統領から近代化路線を引き継ぎ、二〇年以上、旧宗主国フランスとの関係を維持した西欧志向の政

策下にあった。民族文化などは旧態依然たるものとして置き去りにされていたともいえる。しかし二〇〇〇年に就任した三代目大統領の時代になると、大統領自らが民族文化への回帰を積極的に訴えるようになり、主要民族のウオロフ語の普及も進んだ。

そんな社会情勢のなかで、少数派の民族に属する知人たちが民族文化の行事を開催するというのだから、一体何が起きているのかわたしは

子ども時代にそういったものを経験している世代が中心になって、それらを後世に残してゆきたいのだという。

しかし、コンピュータ会社を経営し、実利を追求する世界に身を置く知人から聞く説明としては、納得のゆくものではなかった。二〇一五年にこの行事に参加したときは疑問ばかりが残ったが、今度は撮影班とともに来てくれと強く頼まれたのだった。

文化の力で変えていく

そして二〇一七年、一〇回目の民族文化週間の

伝統楽師が奏でるリズムに乗って踊る女性



取材に民博の取材班とともに出かけた。そこから見えてきたのは主催者や参加者たちの異なる思惑であった。

この行事の立案者は、地域ラジオの局長である。地域ラジオは地域の発展を責務としながらも、広告や政治活動などから収入を得ることを禁止されている。そのため局長は、FM電波が届く地域を回り、ニュースを集める拠点を作った。移民の妻

たちを動員して、女性たちの自立的な経済活動を支援した。そして彼女たちを主役として民族文化週間を開催し、全国によびかけた寄付金をラジオの運営資金に充てることを考えたのである。つまり民族文化週間は、ラジオ局にとっては資金源、女性たちにとっては伝統社会とは異なる活躍の場、知人にとっては伝統文化の継承の機会であった。さらに隠れた意図もあった。局長は、彼らの住む地域が中央政府や他地域からの関心をよび、発展の契機になることを狙っている。中央への圧力ではなく、文化を力として存在を主張する静かで強い住民運動である。

華やかさの奥を見つめて

セネガル最東端の同地域は労働移民が多く経済的にはうらやましいが、首都からは遠く、独立後の国家政策においては忘れられた地域になった。そうした「周辺」諸民族である彼らの文化に関心をよび、自身の誇りと尊厳を取り戻したいという野心もある。また海外から送金す



上：村で開催される民族文化週間に向かう道中
下：村の女性たちが取材陣や招待客に昼食をふるまってくれた

る移民に対する地元に残った人びとの対抗心も見え隠れする。

民族文化週間はニンケ民族が中心になって開催しているが、マリとモリタニアと国境を隔てるセネガル河流域に共存する多民族の連帯をスローガンにしている。決して自民族中心主義を主張しないのが成功の秘訣^{ひそけ}だろう。ラジオは連帯の声を届ける電波なのである。

取材には民博からだけでなく、国営や民放のテレビ局なども参加していた。取材陣の存在は、主催者や参加者に対して行事の価値を高める役割を果たした。そして、民博がこの取材で収録した儀礼、歌などの演目をまとめたのが「セネガル河上流域の民族文化の映像データベース」で、伝統文化の保全と活用寄予することが期待されている。

本データベースは、映像だけを見ても踊りや華やかな衣装に目を奪われるが、ぜひDVD版「セネガルを越える人と地域ラジオ」(みんぱく映像民族誌第三四集)と合わせてご覧いただきたい。

今日も宝物は 南洋の島から島へ

門馬 一平 民博 特任助教

紹介する映像は、二〇二二年の東京ドキュメンタリー映画祭で特集上映されたものである。初めて公開されたのは一九七一年で、テレビ番組「すばらしい世界旅行」シリーズのなかで三週にわたって放送された。撮影されてからおよそ五〇年の時を経て大きなスクリーンで上映された映像を観ながら、わたしは自分の旅をまざまざと思い出し、思わず笑ってしまった。

迷走する船団

パプアニューギニア、ミルンベイ州の東に広がる島嶼域。そこでは貝から作られた宝物、首飾り「バギ」が時計回りに、腕輪「ムワリ」が反時計回りに、島々のあいだでやり取りされる。B・マリノフスキは「クラ」とよばれているこの交易を、その後人類学の古典的名著となった『西太平洋の遠洋航海者』（一九二二年）のなかで詳細に描いてみせた。市岡監督はこの本を読んでクラに強く惹かれ、プロデューサーの牛山純一に相談、番組を制

作するに至ったという。その顛末は番組が制作された経緯を記録した監督の著書『KULA——貝の首飾りを探して南海をゆく』（コモンズ、二〇〇五年）に詳しく。映像は、ある村の首長トコヴァタリヤが、バギを求めて二二〇キロ離れた島までクラの船団を組んで向かう過程を追う。ところが船団が目的の村へ着くと、バギはまだ到着しておらず、さらに先の島にあるという。それを知った彼らは先の島を目指す。撮影隊は島から島へとたらい回しにされ、待ちぼうけをくらいい、クラはまったく予定どおりに進まない。現在と違って使用できるフィルムに限られた当時の撮影隊は大変だったことだろう。バギを探して迷走する船団と、それに振り回される撮影隊を想像して映画館の端で笑いながら、わたしは自身のフィールドワークと映像を重ねていた。

あっちからトボトボ、こっちらトボトボ

映画「クラ」が撮影されてから四〇年後の二〇二一年。当時学生だったわたしは、初めてミルンベイ州に降り立った。そして、クラの撮影場所から四〇〇キロほど離れたところにある諸島でフィールドワークをおこなった。そこでは、石斧の形をしたまた別の宝物「トボトボ」がクラと似たような方法で交易されていた。わたしは、

「クラ——西太平洋の遠洋航海者」

1971年/日本/日本語/67分/DVDなし
監督：市岡康子
出演：トコヴァタリヤほか



クラに向けて航海する船団



カヌーの上で交渉するトコヴァタリヤ(右)

(どちらも映画「クラ——西太平洋の遠洋航海者」より。製作：日本映像記録センター)



儀礼のために並べられたトボトボ。バギと現金も用意されている
(パプアニューギニア、2018年)



トボトボのやり取りをする老人たち
(パプアニューギニア、2014年)



現代の航海カヌー。クラで使われていたものより大きく性能がいい
(パプアニューギニア、2023年)

映画に出てきた首長トコヴァタリヤと同じくらいの歳の老人に同行して交易に参加した。目的の島に到着し、交易パートナーとの交渉を終えた老人に、わたしは交渉の結果とこれからの予定を詳しく聞いた。老人の説明は要約すると次のようなものだった。

——A村に住む私の親族のところに、B村の私のイトコが以前貸したトボトボを取りに来る。イトコは以前の私への借りを返すため、私にそのトボトボを渡す。そのトボトボを持って、私は隣の島でおこなわれる、妻の大叔父の葬儀に参加し、トボトボを贈与する。その葬儀でトボトボを受け取った大叔父の親族から、私の交易パートナーがトボトボを受け取り、彼らに対する以前の貸しを回収する。彼はそのトボトボを私に贈り、私は息子の姻族がおこなう儀礼に持っていきそのトボトボを贈与する。息子の姻族は儀礼でそのトボトボをまた贈与する。

何が起きているというのだろうか。本当にそんな予定で事が進むのか。彼がトボトボを手に入れるのはいつになったら見ることができなのか。しかも手に入れたと思ったらすぐに手放す予定だと

いう。一体どうして、このようなことをしなければならぬのか。わからないことだらけだったが、目の前にいる小さな老人が、自身の知力や体力を振り絞って、必死にこの石の宝物を追いかけているということだけはわかった。

人生をかけた航海

映画「クラ」では、村人たちが振り回され苦勞しながらも、命を賭した航海によって宝物を手に入れようとしていることが、丁寧に描かれる。同時に、人生をかけてクラに興じる人びとのあいだに、一種の繋がりが生まれていることが見えてくる。そこで改めて、わたしたちは気づかされる。彼らは命懸けで人と繋がっていたのだと。人生をかけて生み出すこの連帯こそが、クラの真髄なのかもしれない。マリノフスキが調査をしてから一〇〇年以上が経った。クラは世代を越えておこなわれ人びとを魅了し続ける。宝物は今日もまた南洋の小さな島々を巡っている。



バギを手に入れた男性。今でも人びとは宝物を求めて航海している
(パプアニューギニア、2017年)

「すみません」 「かまいません」

さがら けいこ
相良 啓子
民博 特任助教

最近、店頭や外出先で思いがけず手話で対応してもらえる機会が増えた。手話を取り入れたテレビドラマが続けて放映された影響だろうか。手話でコミュニケーションができる機会が増えるのは嬉しいが、日本語に日本手話の語彙を当てはめただけでは、ろう者とうまくコミュニケーションがとれないことがある。日本語と日本手話では語の意味や用法が異なるからだ。

筆者は中途失聴者で、日本語を第一言語として、日本手話を第二言語として習得している。日本手話を覚えて使い始めたばかりのときは、このふたつの言語のはざまで、時折、おや？と思う場に遭遇してきた。例えば、「すみません」の使い方だ。日本語の「すみません」には幅広い意味があり、謝罪や依頼だけでなく、相手を立てた感謝の意味でも使われるのに対して、日本手話の「すみません」（利き手の親指と人差指で眉間をつまむようにした後、その手を顔の前に立てて少し前に出す）は、謝罪のときにしか使われない。日本語では、差し入れをもらったとき、「すみません、お気遣いありがとうございます」と感謝の意味も含めて言うことがあるが、同じ状況で、日本手話の「すみません」をあらわすと違和感が残る。ここは、お礼を言う場であり、謝る場ではないため、日本手話の「すみません」は、その場にそぐわない語となり、「ありがとう」がふさわしい。

日本手話の「かまわない」（立てた小指をあごに繰り返して当てる）についても、日本語とは違う用法があり、少し複雑だ。日本手話の「かまわない」は、日本語と同様に「椅子に座ってもいい？」「いいよ（かまわないよ）」というように、許可の意味で使われるが、それだけではない。学生時

代、ろうの友人が忙しそうに困っているように見えたので、「手伝おうか？」と聞くと、友人はにこにこしながら「かまわない」と手話を出した。少々戸惑いながらも「不要」と言っているのだと受け止めたのだが、この場合の「かまわない」は、「ありがとう、よろしくね」という意味で使われるのだということ、だいぶ後になって知った。つまり、手の表現だけを見ていて表情に目が届いていなかったため、反対の意味にとらえてしまったのである。ちなみに、ろうの友人によると、首を横にふるしぐさと同時に「かまわない」を出すと、「手伝わなくてもいいよ」という意味になるという。「かまわない」の使い方には個人差もあるようだが、日本手話は手だけであらわす言語ではなく、眉や口の動き、視線、頭の動き等にも文法が組み込まれている。

このような、日本語とは異なる意味や用法をもつ日本手話を身につけるためには、ろう者のコミュニティに入ってともに活動し、語り合う経験を積むことが求められるだろう。



日本手話の
「かまわない」

『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく 2023年7月号

第47巻第7号通巻第550号 2023年7月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 島村一平 中川理 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2023年
7月号

編集後記

大衆社会論の古典『大衆の逆説』で有名な思想家オルテガ・イ・ガセーに、『狩猟の哲学』という人間洞察の書がある。「血を見ることが何よりも嫌いで狩りとも縁遠い」と自身のことをことわったうえで、「ただ生きるだけ」ということができない人間という地上でただひとつの生物が生きていくために不可欠な、あらゆる「気晴らし」の根源的活動が狩りだと主張する。たしかに、どんなに文明が発達しようと、狩りのイメージと比喩は生活のなかにあふれている(肉食系……などもか)。まいしろさんのエッセイと今回の特集を読みながら、そんなことを感じた。要するに、「人類みなハンター!」

みなさん、戸締まりと火には用心しましょう。

お知らせがふたつあります。まず、4月から左記のとおり、編集長以下メンバーが新しくなりました。今号から少しずつ新しい色が出ていくものと思います。どうかよろしく願います。次に、かつて編集長をつとめられた庄司博士名譽教授が逝去されました。最後にお見舞いした際、こんなお言葉に寂寥いかんともしがたかったものです。「もういっしょに釣り、行かれへんな」。ご冥福をお祈りいたします。(樫永真佐夫)



次号の予告 8月号

特集「統制下を生きる」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

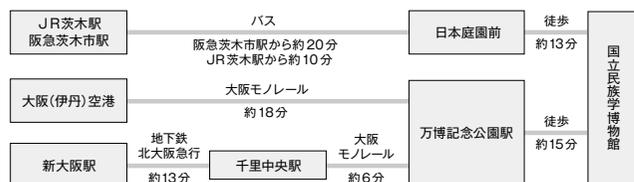
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)
年末年始(12月28日~1月4日)



主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



国立民族学博物館ミュージアム・ショップ オリジナルグッズのご案内



NEW

ウォーターボトル

ポケットサイズの軽くて小さな水筒

日本手話で数字の1から10のイラストが描かれています。
おでかけやお散歩のお供に！ お家でのくつろぎタイムに！

保温保冷対応(ステンレス製マグボトル)

カラー：ネイビー 容量：120ml 重さ：約115g(本体のみ)

本体サイズ：高さ 約131mm× 直径 約45mm

定価 **2,300円**(税込)



Tシャツ

手話数字のイラスト
Tシャツも大好評！

カラー：デニム

サイズ：S、M、L、XL

定価 各**2,700円**(税込)

2023年8月31日(木)まで
ウォーターボトルと
Tシャツのセット購入で

送料無料!

友の会割引との併用はできません

お問い合わせ

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ(水曜日定休)

オンラインショップ

「World Wide Bazaar」

<https://www.senri-f.or.jp/shop/>

